

編集後記

「惑星大気」特集ということでゲスト編集員に任命されましたが、不徳のいたすところで関係者の方々（執筆者、査読者、そして、高木さん、中村さん）には多大なる御迷惑をおかけしてしまいました。この場を借りてお詫び申し上げます。

さて、本特集においては若干意図して（あるいは単に手抜きしてお友達ですませて？）大気力学/理論な話題を多くしてみました。惑星大気循環の力学に関するオタクキーな興味の背景を皆さんに少しでも伝えることができれば、というわけがあります。流体力学関係の各執筆者にはこの機会をうまく利用していただくべくお願いを致しましたが、いかがでしょう。

逆に、惑星大気の諸現象のサマリー、昨今の探査機やHSTによる観測のサマリー（特に火星や木星のかな）を期待された向きにはちょっと期待外れであったかも知れません。日本における特に伝統的气象力学の研究者は形而上学に走っていて地学的実際に弱い方が少なくない。私などその最たるものであります。気象庁という大企業があって、特に、地球全球を対象とする大規模気象学においては、観測とデータの生成は気象庁現業の仕事、数値モデルを作るのも気象庁現業の仕事、データを解釈して構造を見出すこと、構造を描写する概念モデルを作るのが大学の研究者の仕事、という分業状態にあったからでありましょうか。

惑星大気の研究においては、気象庁という現業組織はないわけですから、研究者自前で必要な観測をおこないデータをあつめねばならないはずなのですが、これまた米国・ソ連の観測に依存していたので自力更生の精神には弱いところがあります。

一方で、一つ、二つの観測点が得られたところで大気循環の構造に関してはなかなか物が言えません。惑星大気に対して多点同時観測を行えるような観測技術の圧倒的進化（マイクロ探査機の開発と多数展開）が行われない限り、理論的形而上学的アプローチでもって攻めざるを得ないところがあるわけです。それでいて意外（当然?）なことに、地球大気（海洋）の経験を再構成し、数値モデルを作成することにより、惑星大気の構造を計算機上で探索する、ということが今だあまり深くは起こなわれておりません。地球大気（海洋）の経験を再吟味し、数値ソフトウェアを作成していく、という手間がたいへんであるのと、スーパーコンピュータの惑星大気研究に向けての利用が、地球大気（海洋）のそれにくらべて容易ではなかった、ということによっていると思われまふ。

わざわざ探査機を飛ばさなくても仮想世界として計算機上に構築可能であることぐらいは、あらかじめ完全に掌握したいわけですが、なかなかです。数値モデルはちょっと地球を離れるととたんに動かなかったりします。散逸構造が先見的にはわからんからであります。ひとつひとつあらまほしき構造を解きほぐして行かなければなりません。

林 祥介

「今号から編集幹事を担当することになりました中村です。種々の不手際から発行が遅れてしまい申し訳ありません。それでもなんとか発行にこぎつけましたのは、前任の高木さんはじめ皆様方の御協力があったればこそです。今後とも、どうぞよろしくお願い致します。」

中村 良介

編集委員

村江 達士 [編集長] 高木 靖彦 [幹事]

荒川 政彦 飯島 祐一 海老原 充 加藤 工 木村 眞 小林 憲正 小林 直樹

佐々木 晶 田近 英一 中村 良介 並木 則行 平田 岳史 松島 弘一 渡部 潤一

1998年6月25日発行

日本惑星科学会誌 遊・星・人 第7巻 第2号

定 価 一部 1,750円 (送料含む)

編集人 村江達士 (日本惑星科学会編集専門委員会委員長)

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1 九州大学理学部地球惑星科学科

印刷所 〒135-0011 東京都江東区扇橋3-5-10 星光社

発行所 〒152-8551 東京都目黒区大岡山2-12-1 東京工業大学大学院理工学研究科

地球惑星科学専攻内 日本惑星科学会

TEL 03-3720-9885 FAX 03-5734-3538

本誌に掲載された寄稿等の著作権は日本惑星科学会が所有しています。